

複素系の哀歌（第1回～20回）

作・龍門 歩

ほとんど流れない水の分子が、弱い風に巻き上げられて舟縁ふなべりを叩く高い周波数の勾配は付かぬまま、続く不連続の粗密波が骨を打つ。雲寺くもであらあ在央あの体は小さな屋形の中でリズムカルに静止しておらず、靴底に貼り付いてきて離れない膜を切断する方法を模索していた。噛み切ろうとしたり、指に絡めて引き千切ろうとしたりするが、どうしても切れない。

「どうなってるんだ、この膜は？」

膜はたぐり寄せてもたぐり寄せても端がなく、在央は疲れて底板にへたりこんでしまった。

「ナイフもハサミもないんじゃ、手の打ちようがないな」

「あるよ」

ケータイでメールを打っていた永位ながい婁巳るみが、刃先を出したままのカッターナイフを舐先の方から放つてよこした。左手で受けそなった在央は「いてっ！」と声を上げた。その声が両サイドのコンクリート護岸で幾度か反響した。

「静かにしなよ、ドジ！」

婁巳が意地悪そうな口調で言う。

「いてえな。手、切れちゃった」

ゆらゆらと舟板を揺らして婁巳が寄ってきた。そして、在央のてのひらを縦に伸びる傷口に唇を当て、流れている血を舐め取った。

「サンキュ」

在央が言うと、婁巳は傷口を爪で引き裂き、再び血を吸った。

「治してなんかやらない」

「やめてくれよ」

救急車がサイレンを鳴らしながら上の道路を走り去った。二人は屋形の中で身を縮めた。

「見つからなかったみたいだ」

「のんきなこと言うと、こうしてやる」

婁巳はころがっていたカッターナイフを取り上げて、在央の傷を手首に向かってさらに切り裂いた。そして、いっそう流れ出した血を吸った。

「リオは誰のものでもない、あたしのもの」

婁巳は在央のことをリオと言っただ。

「俺、明日は予備校に行かなくちゃならないんだ」

「どうしてっ？」

婁巳が嬌声を発した。膜が震えた。

「そうだ、この膜、早く切り離してくれよ」

「なに、膜って？」

「これだよ、これ」

在央は目に見える膜に、確かな質感を感じていた。

「紐じゃないの？ それ」

「いや、紐の中には俺たち、隠れられない」

「だって、あたしたち出てきたばかりだよ」

「そんなことはない、長いあいだ戻ってきた」

「あたし、戻りたくない」

吸い取られない在央の血が、舟板にしたたり落ちる。

在央は傷に膜を巻き付けながら、絶望的な表情で川面に顔を突っ込もうとしたが、膜に喉を締めつけられて噎せた。

「どうして！ いつでも戻れないんだぞ。さ、行くんだ」

コンクリートの護岸にぶら下がっている縄ばしごに在央が手を掛けたとき、婁巳のケータイの着信音が、上を走る自動車群の音でかき消された。相手は非通知だ。

「待っていてくれないんですか？」

婁巳が尋ねた。青ざめた顔をして屋形の柱に凭りかかった在央は言った。

「よし、追いかけよう。この出血が止まるまで」

婁巳は護岸に結びつけていたロープをほどいた。在央が護岸を蹴った。舟は運河のゆるやかな流れに乗った。膜は切れたように見えた。天空では霞む恒星たちが激しく動きはじめている。

マイナスを抱えてなんかいなかった。棘状の空気が衣服を貫いて雲寺在央の皮膚を刺しているのとは無関係に、前頭葉のシナプス回路に電流は流れていない。黒板に書かれる文字、記号、講師の声、言葉、身振りはほとんど意識の中に侵入してこないどころか、在央の境界非条件から漠然と延びる為体の知れない膜が多次元の散逸に巻き込まれてゆく。他の受講者たちはほとんどひと色の眼で集中しているように、在央には見えないが、たしかに元をもつ集合と化していた。その元が異なっていて、在央は別の集合に属しているとも感じないのであった。

八月に入ったばかりの火曜日、授業が終わって在央が教室を出たとき、「ひさしぶり〜」と呼びかけられた。振り返ると、高校一、二年のとき同級の大杉だった。一年のころはよく遊んだり話をしたりした仲なので、すぐに名前を思い出した。

「こんなとこで何してんだ？ 雲寺」

訊かれたくないことを尋ねられて、在央は多面体の表情を隠さなかった。

「きみこそ、どうしてここに？」

「バイトだよ、夏期講習の……」

と、言葉が引きつけを起こした瞬間と、二人がお互いの立場を理解した瞬間とは同時だった。

在央が突つかれる気持ちのポイントを外しながら言った。

「僕は二浪だ」

在央は *a* 符号の階段を昇りはじめ、大杉は 符号のエスカレーターを下りはじめた。膜が4次元のメビウスの輪と絡み合い、座標を反時計回りに90°回転した中空へ二人を埋め込んだ。

「苦しくなんかない」

在央が呼吸をしながら言う。

「太りがまんするなよ。ここでは息を止めておくほうが楽なんだ」

口と鼻に膜を巻き付けた大杉がなだめた。

「ハンバーガーなんか嫌いだ」

在央は両腕を背中で交叉させて地団駄を踏んでいる。

「僕は大学二年だというのに、きみは予備校通いか」腕組みを、右腕を上から差し込んだり、左から差し込んだりしながら大杉が同情した、「恐ろしく効率の悪いエンジンだな」

「君に疑いはなかったのか？」在央が言う、「疑いを持たないのか？」

「疑いつてなんだい？」

大杉は滑らかなフローリングの上で後ろ歩きを繰り返しながら眉をひそめた。

「前進するときは腕と脚の振りは逆なのに、後進すると同じ向きになる。なぜだ？」

そう言うって大杉は在央に微妙な笑みを返した。

「そう、それが疑問なんだよ。そういう、理由を探ろうとする心理的活動が疑問を抱くことなんだ」

「君は相変わらず呼吸をしている」大杉が軽蔑の表情を浮かべた、「呼吸というのは、人体という循環系における環境との一義的な接点だ。その接点は直線と、カーブしない円とを融着させるしかないだろう」

在央は怒り狂って撒かれていた砂を掻き寄せて富士山状に盛り上げ、舞い降りてきた呼吸器を天辺に逆さまに突き立てた。

「君に呼吸を吹き込むために、お被いをするよ」

足元の地下から取り出した烏帽子をかぶり、衣服を神主の装束へと動的擬態を施した。そして、ふいと伸びてきた手から受け取った御幣（ひまひ）を捧げ、前屈みになって振り回した。

「甘ったれたことをするな」大杉が怒りを露わにした、「可能なことしかしかないなんて、多くの人間が陥るルーティンだ」

そう言う大杉は、正確にかどうかわからないが、9角形を描いて後ろ向きに歩いている。足と腕の動きを反転させようと、汗をかきかき試みるのをやめた。

「僕は正三角形が大嫌いなんだ。正三角形は逮捕の歌。正義が犯罪に変わる歌」

そう言う大杉はステージに立つて字幕を掲げ、パイプオルガンをバックに詠唱しはじめた。観客が2000席をほぼ埋め尽くしている。

疑にあらず義にあらず

真にあらず贖にあらず

正にあらず不正にあらず

走にあらず歩にあらず非歩走にあらず

回転にあらず立錐にあらず

騒にあらず静謐にあらず非静騒にあらず

勾配にあらず平坦にあらず

曲にあらず直にあらず

密にあらず疎にあらず

濃淡にあらず粗密にあらず

個にあらず部分にあらず全にあらず

組織にあらず系にあらず

孤立にあらず群立にあらず

開放にあらず閉鎖にあらず

旋律にあらず拍にあらず

響きにあらず意味にあらず

波にあらず粒子にあらず

虚にあらず実にあらず

坐ってもいない、立ってもいない、横になってもいない観客に向かって大杉は懇願した。

「来ないでくれ！なぜ、父が逮捕されなければならなかったのか 僕はそのことを疑うこと

もなく、問いもしなかった、もちろん封印もしなかった」

「だったら、復讐しようと思わなかったのか？」

観客の一人がステージににじり寄りながら言った。

「いや。僕の脳も家族の気持ちもフラクタル状態になりながら、僕は分解し、解読した」

「だめだ！」ステージの上手から現われた在央が近寄る観客を突き飛ばして言った、「それじゃ、僕が君の首を絞めてやる」

「そうだ、やれ！」

「復讐だ！ 隣人愛だ！」

「恥をかくには早すぎるぞ！」

「たかやす！」

中年女性が駆け寄って、大杉を抱きしめた。

「おかあさんが守ってあげるなんて思わないでね」息子にそう言うってから雲寺に命令した、「この子の首を絞めなさい、そうすれば息を吹き返すわ」

粗末で小さなプラットフォームだった。祖父の体験話が在央の脳裡に蘇った。未決的数式が客車の窓から身を乗り出していた。眼鏡を掛けた父だ。先頭の蒸気機関車が呼吸をし、大きな動輪付近から蒸気を吐き、白黒の煙を噴き出している。

「何しにいくの？」

祖父は、曾祖父に窓越しに首を絞めつけられながら尋ねた。

「もちろんさ」

曾祖父は悲しげに答えた。

「どこへ行くの？」

赤ん坊（祖父の弟らしい）をおんぶ紐で背負った曾祖母が、砂利の上に横たわっている枕木に這う2本の鉄路を眺めた。雑木林と草むらの中へ延びて消えている。曇天だ。落葉樹の暗い緑に覆われた三つか四つの里山が、藁葺きや瓦屋根の憂鬱げな家々をのせ、生気を失った田んぼの広がる平地からせり出している。フォームでは幾組もの別れが繰り広げられている。

「私には行くところはない」曾祖父は望みを空洞にした眼差しだ、「お前を置いて、どこへも行かない」

曾祖父は、祖父の首を掴んだまま車窓へ引き上げようとした。

汽笛が鳴った。粗末なカーキ色の略帽と兵隊服を着て、破れかけた背嚢を背負った曾祖父は祖父をフォームにそつと下ろした。

「満州には行かないから」と、壮年の逞しさを奪われたかのような曾祖父は力なく言った。
「……………」

五歳の祖父は、何を言いたいのかわからぬまま涙ぐんだ。

「もう戦争は終わってるのだから」と、曾祖父が言った。

「広漠としていて、寒いから行くの？ あなたなんか居なくてもいいのよ」

もんぺ姿で負けん気の強い表情の曾祖母が、きつい口調で曾祖父に向かって言った。

機関車のピストンが緩慢に動きはじめ、客車の連結器の軋む音を立てながら、ゆっくりと走りだした。

「あなた……………」

曾祖母は上半身を乗り出す夫に声を掛けた。祖父は泣きながら、しばらく列車と一緒にフォームを走った。列車のスピードが速くなり、幼い祖父の駆け足では追いつかなくなつて、手を振る曾祖父の姿が視界からなかなか消えなかつた。大小の雑草たちが、走る汽車によって引き起こされる風にたなびいた。

在央が振り向くと、大杉隆康は抱きすくめている母の肩越しに、数人の男に囲まれ、自問を背中に表わしながら、それでも毅然として家から出てゆこうとする父と巖夫を見ていた。観客のなかの何人かが、巖夫の逮捕に抗議した。巖夫は刺されていたのだ。在央はまったく見ていなかったが、引き摺っている膜を剃刀研ぎの皮革のように鞣した。

「あなたはネックカットしないのね」

隆康の母が在央に言った。

「わかりません」在央は急に自信がなくなり、呼吸器を放り投げ、鞣した膜をかぶってうずくまった。

「だから疑問を抱くには、その疑問の正当性を疑わなければならない。懷疑とは、そういうものさ」隆康が自分の額の骨を蓋のように開け、在央の膜を引き剥いで言った。隆康の前頭葉が剥き出しになった。

「なにをするんだ！」

隆康の前頭葉の粘膜のでかりはすでに頭骨と皮膚に覆われていたというより、在央は目を背けなかつた。それどころか、テーブルの向かい側に坐ってコーヒーを飲んでいない隆康を視認した。在央の後頭葉がフラクタル図形を描画しただけだったのかもしれない。

「君はマンデンブロー集合の発散領域の外へ逃げ込んでいないか？」

隆康が在央の瞳孔を刺して言った。その矢は後頭葉を突き抜けず、迂回して野っ原へ飛んでくる。

「いや」と在央は答えた、「発散領域が僕を逃さないんだ。成長する雲が追いかけてきてどんどん飲み込まれる。僕はただ雲の中心に向かってゆくのだ」

「超巨星の断末魔のガスの繭も、君を弾き飛ばすだろう。君はそれを望んでいないか？」

「少なくとも、爆発した星雲に中心が広がってるなんて期待はしてないよ」

在央はコーヒーを少し飲み、生気のない呼吸によって頬杖をついた。

「僕は疑問を検証するために高校を過ごした。父がなぜ逮捕されたのかを知りたくて」隆康がふいに現われて言った。

「ひいお祖父さんがなぜ満州へ行かなかつたのか、僕はその原因を追求することすらできない」つぶやいた在央は我に返つたように、「なぜ、君は突然現われたんだ？」

そして不思議そうに隆康の肩に触れる。

「君が、シナプス内の電流を、眼底スクリーンに向かって逆流させてただけさ」

「バックライトだろうか……」在央は予備校の教材をテーブルの上に放り投げた、「疑問を通底することなんか、考えてもいないよ。あまりにもタイムラグが大きすぎる」

「当然だよ」と隆康が言う、「君はひいお祖父さんの夢を見たお祖父さんの話を聞いたお父さんから、その夢について聞いたんだろ？ 君がひいお祖父さんが満州へ行かなかった理由を問うことに執着しているとすれば、解を導く公式は……」

「待ってくれ」在央が遮った、「僕は公式が好きなんだ。自分で公式も定理も導くつもりさ」「素晴らしい遠回りだ、しかも航路には何が待ち受けているかわからないよ」

「宇宙塵でもワームホールでもいいさ。お祖父さんの夢に出てきたひいお祖父さんの現し身うつみに追いつけるかもしれない」

「過去に追いつくのか……」

隆康がテキストを小脇にはさんで考え込んだ。

「そう、もうはるか未来に行ってるはずだしね」

在央はトルストイの『復活』を読みかけの行から読みはじめた。

「刑法なんだよ、社会は」

隆康が言うと、付近の膜が萎縮した。二人の脳に巻き付いた行列の道路に電位差を乗せたクルマのヘッドライトが光跡を波打ち、制禦しない。細胞内を貫通するトンネルが対数交叉し、情報に乗せたモーターカーが速度を失わない。

在央の対数交叉で数百億の衝突が発生した。

「刑法の体系なんだよ、社会は」と隆康は繰り返した、「基本的人権などは、それを補完する鏡像ですらないのだ」

在央は動揺して『復活』のページをめくり、一節を読み上げはじめた。

「何よりもニエフリユードフを憤激させたのは、裁判所や官庁に納まり返っている連中が、人民から集めた税金から莫大な俸給を受け取って、同類の役人たちが、やはり俸給ほしさに書いた書類を調べ、自分たちの書いた法律を犯す人たちの行為にいろんな条項を当てはめ、その条項に照らして、彼らを自分らの眼の届かぬ遠隔の地に送ってしまい、ために、彼らはその地で、残忍で粗暴化した典獄や看守や護送兵の手中に陥って、精神的にも肉体的にも数知れず滅びていくという事実であった。」

監獄や駅通の実状を詳細に知って、ニエフリユードフは、囚人たちの間に蔓る悪徳 泥酔、賭博、残忍、その他囚人たちの演ずるいろんな戦慄すべき犯罪、それに人肉啖食も、偶然の出来事ではなく、愚鈍な御用学者どもが説くような類廃現象や犯罪型や異常性格の現われでもなくて、人が人を罰し得るといふ奇怪な迷誤からくる必然の結果であることを見てとった。」

(<http://www.press.tokai.ac.jp/issu/forst/ato.html> より引用)

被告人と検察、弁護士、そして傍聴者が法廷に鳴る裁判長の声を聞いているか。

「人が人を罰し得るといふ奇怪な迷誤　？」隆康は嘲笑ぎみに言った、「人が人を罰しないで、どのような存在が罰するのだい？　神か？　仏か？　笑わせちゃいけない。人を罰しない権利が人に付与されていると思うこと自体、傲慢なんだ。人は人を罰しなければならないという、アブリオリの罪を背負って生まれてくるのだ。トルストイこそ迷誤に陥ってるよ」

「ひいお祖父さんが満州に行かなかったのは、刑法のせいだというのかい？　とんでもない」在央は傲然と尋ねなかった、「膜を延ばすことによっても解は見つからないがね」

在央は舌の中から、切れ目もなく境界もなく有限でもない膜を引き出した。そして、膜の広がり内部に繭を作って入り込み、隠れはしないで首だけ出した。

「僕は逃がっている」

その言葉を待っていなかったはずの隆康も、M・デュルフレの『アランの名による前奏曲とフーガ』の旋律を知らなかった。

「告白しちやだめだよ、君」

被告人が言った。実際、在央は繭の外に出たのにまだ中にいる。一部が出たのではなく、全体も出ていないのだ。

「私の罪が確定するわけではないけど」

「うそだ！」

在央は否定した。

「僕もそう願いたいね」

隆康が黒板にローレンツ・モデルの数式を書いた。

$$\frac{dx}{dt} = -\rho(y-x)$$
$$\frac{dy}{dt} = -xz + rx - y$$
$$\frac{dz}{dt} = xy - bz$$

「蝶よ花よと育てられ……」被告（って誰だっけ？）がメロディーをつけて笑った。

「そうだとも」と裁判長が言った、「その3変数 x, y, z の取る値を3次元空間上に時間軌道として

コンピューターで計算すると、ゆがんだ曲線だらけで蝶の羽のような形になってモニター上で運動する。この軌道は、常に羽の範囲内に納まっているが、二度と同じところを通過しない。逃げられないのに逃げられる犯人のように」

「僕はほんとうのことを話したいんだ、じゃましないでくれ！」

在央は被告人に向かって叫んだ。法廷内に定在波が生じ、建物に共鳴して津波は起こらなかった。

「ほんとうのことを話すのは、誰ですか？ いや、誰であろうと、宇宙はローレンツ・モデルのように旋回しています」裁判長が言った、「漂流する宇宙は無を蚕食しません。ただ、有へと相転移するだけではないのです」

「裁判長」弁護人が声を上げた、「被告人は蚕食や相転移に関する罪人ではありません。宇宙全体が量子テレポーテーションに冒されているのではなく、被告人の対人は」と言葉を切つて在央のほうに視線を投げた、「あの……」

「違う！」

被告人はそう言つて目をつぶつた。被告人は荒漠たる空の下の陰景を膜に転写しなかった。むしろ、荒れ狂う重力面に街や草木や土や砂漠が徐々に滲み出るのであり、傍聴者が静かではなくなった。隆康が、「真犯人は雲寺くん……」と途中で言葉を失い光合成に背を向けた。

「ありうる！」在央は両腕を広げた、「僕はグレーではないかもしれない。色という色が僕に磁界を仕掛けてくる。維管束から葉脈へ導管するのです」

「色が磁界を仕掛けてくるだって？」隆康が色をなして笑つた、「恋愛の汁液が一酸化炭素中毒だなんて社会正義にもならない」

そして、広げていた在央の両腕を力ずくで閉じ、「はつきり言えよ」とさとすように言った。

「それは被告人の責務です」弁護人が裁判長に向かって言った。

「いや」と検察官が証拠品のオートフォーカス眼鏡をかざし、「もしこれが被告人の曾祖父のものでなかったら、人が人を罰することの不可避性を証明してもらいましょう」

「曾祖父がなぜ全裸の大地、地球2号へ行かなかつたのかですって？」

隆康が教壇へ飛び上がった。

$a>0, a\neq 1, b>0, b\neq 1, M>0, N>0$ とする

$$a^m=M \Leftrightarrow m=\log_a M \quad \log_a a^m=m$$

$$\log_a a=1 \quad \log_a 1=0 \quad \log_a \frac{1}{a}=-1$$

$$\log_a MN=\log_a M+\log_a N \quad \log_a \frac{M}{N}=\log_a M-\log_a N$$

$$\log_a M^p=p\log_a M \quad \log_a \sqrt[n]{M^m}=\frac{m}{n}\log_a M$$

$$\log_a M=\frac{\log_b M}{\log_b a} \quad \log_a b=\frac{1}{\log_b a}$$

$$a^{\log_a M}=M \quad (\log_a b)(\log_b a)=1$$

(「カルキング」より)

「これが対数の基本です。なんと美しい塩基配列ではありませんか」
「美しさなら、これに勝るものはないでしょう」

言ってから裁判長は判決文を読み上げた、「いー行くオール笑むシー事情」

$$e=mc^2$$

そして、「この数式から核爆弾を思いつくなんで、まさに神の頭脳と称えるべきでしょう」と判決理由を述べて合掌した。

判事も検察官も弁護人も、事務方も被告も在央も隆康も傍聴者も、フラインマンの不満を思い起こして大声で笑いだした。

「電磁量子力学に比較すれば、相対性理論など取るに足りないアイデアにすぎない」と祖父の声が聞こえてきた、「アインシュタインが発見しなくても、いずれは三流物理学者が発見したはずだ」

すると、また全員が笑いだした。こんどは裁判長も一緒に。

「待ってくれ！」祖父が哀願した、「私の夢のことを聞いてほしい」

「ひいおじいちゃんのこと？」

在央が自分に尋ねた。

「ちがう」在央はつぶやいた、「私は……私は……」

「おまえも口をはさんでもいいが」祖父が在央に言葉を継がせなかった、「私はおまえの祖父であって祖父ではないかもしれないから、父のオートフォーカス眼鏡を必要ではないのだ」

そう言っただけは検察官から、証拠品のオートフォーカス眼鏡を奪い取るうとしなかった。それ

よりも、裁判長がうやうやしく返却せず、「マニュアルにこだわる人はほとんどいなくなりまして。世界標準に倣^{なま}いたくもないのでしょうか?」

「わかりません」と祖父は座りもせず立ちもせず、何処にもいないで喋る、「父がオートフォーカス眼鏡を持っていた記憶はないので。だとすると、私の、言葉本来の意味での夢は……」

「いや、はつきり覚えてるよ、おじいちゃん」と被告人が口を閉ざした。

「なるほど。マニュアル眼鏡」と隆康が、予備校のテキストから目を逸らして笑みを浮かべた、「暗すぎて読めないな」

「大学は行かなくていいの?」

在央がふと気付いて、心配そうに尋ねる。

「うん、今日も講義がないから」

「なに学部、なに学科なの?」

大杉隆康が答えなかった、「雲寺には興味ないだろ。刑法の音列じゃないんだから」

「刑法の電界が呻く地球2号こそ、日本の植民地ではありませんでした」と弁護士が言った、

「宏則さんは与吉さんからお聞きになったのでしょうか?」

「わたしは……」と宏則が口ごもらずに、「満州に行かなかった目的については聞いてません」

「目的?」検察官が聞き咎めた、「理由と目的とは、意味が異なりますか?」

すると傍聴者たちが立ち上がり、席を移動しはじめた。ひとりひとり、坐ってみては、坐り心地や被告人や裁判長の見え方を確かめ、順番に移り替わってゆく。

「時間がありません!」雲寺在央が検察官には訴えなかった、「僕は、必然の極限が偶然であることよって僕の膜をカミングアウトしたい」

全員が熱勾配にうなされ、生成されるエネルギーで激しく旋回しない。それどころか一斉に着席し、反論さえしないのだった。

「偶然と必然の自己組織化が膜だというのかい?」

大杉隆康が在央に反問した。

「そうとも言えるし、そうとは言えないでしょ」大杉の母が助け船を出さなかった。それどころか突き放しさえしなかった、「隆康。被告人席にいるのはあなたの自己組織化よ」

「違う!」在央が言った、「繰り返しますが、必然の極限が偶然なのです。だから、僕は知りませんでした」

「あたしが刺したのよ」大杉の母が在央の発言を無視した。

「うそだ」隆康が体を冷たくして、悄然と立っていない父の宏基^{こうき}を膜で引き寄せようとした。

「ほんとうよ」と、母は手に持っていた鉄で膜を裁ち切り、「政治という形而下活動に関わった罰^{ばつ}よ」

「また迷誤ではないのか!」

宏基が落胆した口調で激しく言葉を発した。それを聞いた在央は対象もないまま膜をめくって懇願した、「だから、ほんとうのことを言いたいのです。言わせてください」

「なにも入っていないじゃないか」と隆康が冷笑しなかった、「腹黒くないんだ」と顔をくるくる回しながら笑った。

「私は小さな理想を求めたわけだ」宏基が検察官に向かって引き攀らせた、「そんな理想があったら、理想に殉じてもいいとは思わない」

「わからない」と宏則がレインポウブリッジに架かるロープにぶら下がりながらつぶやく、「父は理想に燃えなかったのか……」

「そうかもしれないわ」隆康の母が応じた、「目的のためなら手段を選ばなかったのよ」

「理由があるなら、理想も目的も空洞化しないでも？」

宏基が息子の膜を離れ、妻に詰め寄る。そこで、その膜が絡め取られて与吉の乗っている列車に吸い上げられた。不織布のヘルメットが消化酵素では分解されず、与吉は口にくわえたまま造船現場の足場を登ってゆく。

「リオ、なにもしないの？」

舟の揺れに体をまかせながら、婁巳が在央に問いかけた。

潮の匂いが増してきた水面を見つめない婁巳の視線に射られず、在央は平静ではいらなかった。婁巳は、在央の手首から流れ落ちる血をすすっているのだ。

「偏心を動かすなよ」

在央が婁巳に言うまでもなく血液は重力と共振せず、婁巳を歓喜へと駆り立てない。行き交う小舟や大型船の波が舟縁をたたき、細波立つ水の僅かな斜面にマンションやオフィスビルの明かりが落ち着きなく映り込み、膜に追いつてられつつ河口へと、隆康も、その他のヒトらも黙々と歩いて立ち止まり、むしろ断続走行ではない座位によって切り口をヘビイチゴの葉でくるむ。そして一面の蓮華の花の絨毯に数多の蛍が小さな雪洞ほんほりを明滅させてローレンツ・ダンスを舞わず、水の甘さ・からさを一条の煩悶にのせるのだった。

「知りたくないの？」と婁巳が再び問いかけた。

「知りたいわけじゃないけど、内容によっては……」

切り裂かれた手首の動脈が婁巳の唇に吸い取られ、その傷口から婁巳の唾液が流れ込んでくる。二極の感触は重なり合い絡み合って砂のようになり、打ち寄せる飢餓感がゆらめく碧空へなだれ落ちる対称の古新聞紙。

「待つてるのよ」

舟を漕ぐことなく流れに任せることもなく水面に浮いていることもなく、血を吸い唾液を注入しながら前頭葉から言葉を発信した。

「何が何を？」

「あのヒトが、あたしたちを」

雨は降ってこない。灰色の雲と青空と星々が空に同居していない。屋形から出ようとし不在央を、婁巳は引きずり出そうとしなかった。それより、膜がまわりついて舟に河口への推力を与えている。

「あたしたちつて、複数のこと？」

在央が尋ねた。

「わからない」婁巳がうなじを曲げ、視線だけ横を向いて発信した。

「それが知らせたくないことかい？」

「だって、ゆっくり行かなくちゃ、あたしたち身動き取れないでしょ」

「まあね」

実際、なにか誰が待っているかわからないのだ。

その時、エンジンのとげとげしい音を消して小型モーターボートが衝突しなかった。三人の若い男が婁巳の方へぐーんと伸びをして言った。

「どこ行くんや？」

$$a+bi$$
$$b \neq 0$$

$$a+bi$$
$$b = 0$$

「一緒に遊びひんか！」

「待っててくれたんだね」

婁巳が声を弾ませた。

「欲望を抑えられへんようになっただけや」

接舷してロープの先端の鉤を屋形舟の舟縁に引っ掛けた、濃紺のスーツを着てネクタイを締めた津軽涼平が咆えなかつた。

「そやそや。今の時代、抑えへんかてええんや」

短い言葉の間に裏声を交えて喋る、やはりスーツ姿の二十代後半、花巻一郎。

ウエットスーツにゴーグルを着けた小浜感輔が屋形船へ乗り移ろうとしてバランスを崩し、水の中へ転落した。小さな波が起きて二隻を揺らした。小浜は水面に顔を出し口から水を噴き上げて言った、「オイは夢かと思うたばい」

そして屋形船にやっこのことでも乗り込むと、「なんば言いよつとか」と雲寺在央に向かって抗

議した、「夢じゃなかって言うたろが」。在央は婁巳の唾液を血に染めた。それは、けっして自分を信じてはいけないということだけでも信じないための婁巳の迷いだった。

「やるで〜」

屋形船の上で、津軽と花巻と小浜がそれぞれ三角形の頂点になった。

「じゃらけつぱい！」

小浜が掛け声をかけた。すると三人は「悪は正義に負ける、正義は善に負ける、善は人に負ける、人は悪に負ける」とおらび、小浜は股間を突き出し、津軽は尻を引っ込め、花巻は腰を右に振った。

「わ〜い、わいの勝ちや」

津軽が言った。小浜がまた「じゃらけつぱい」。小浜自身は腰を左に振り、花巻は尻を引っ込め、津軽は股間を突き出した。

「信心は鯛の頭に負ける、鯛の頭は鮪の刺身に負ける、鮪の刺身は人に負ける、人は信心に負ける」

「わたの負けや」と花巻。津軽と小浜は向き合った。そして、花巻も加わった。

「最初はマル！」

津軽の掛け声と同時に三人は右腕を腰の後ろに回し、左手の親指と人差し指で円をつくった。それから親指を中にして四本の指を握りしめ、小浜は人差し指と中指の間から親指を突き出し、津軽は小指と中指の間から親指を突き出した。最後に花巻が中指と薬指の間から親指を出した。

「欲は無欲に勝つ、無欲は貧乏に勝つ、貧乏は欲に勝つ」

「青信号は黄信号に負ける、黄信号は赤信号に負ける、赤信号は青信号に負ける」

唱和した三人がそれぞれ、「わいの勝ちや」「おいの負けばい」「わたは負けとらんで」と言っただかとおもつと、大声で笑い合った。屋形船が揺れた。

「ほら、一緒に遊ば」

在央が婁巳を促した。

「そりゃよかばってん」と小浜が在央を見遣る、「なんかアイデアば出しんしゃい」

「そうや、アイデア無き者は去れ」

「最初はパー！」

婁巳が言つてグーを出した。あとの四人もあわててグーを出した。

「私の勝ちい」

婁巳が勝ち誇った。

「なんでや?」「なして?」「なんでや?」「なぜ?」

「右より左が強いのよ」

婁巳ひとりだけが左手でグーを出していた。

「おもしろい!」「ええやんか!」「イケテル!」

「でしょ」婁巳はとくいそうに、「左は右より強い、右は真ん中より強い、真ん中は左より強いんだよ」

「なんか根拠でもあつと?」小浜が疑問を呈した、「そんなら、東西南北、上下左右、どいがいちばん弱かとか?」

「言葉の順序どおりだよ」

婁巳がためらいなく言った。

「なして?」

「東は太陽が昇る方角、西は沈む方角、南は宙ぶらりんの方角、北は太陽の行かない方角だから。上下左右は言わずもがなね。やっぱり右が弱いんだよ」

「うんにゃ」と小浜、「浄土のある西がいちばん強かし、右大臣のほうが左大臣より位くらゐが高か
とばい」

「西?」在央が反応した、「聞いたことがある……」

小浜のウェットスーツが振動し、在央の膜へ与吉や宏則が降りてきた。

「だめだよ!」婁巳が絶句した。

婁巳は舐先に顔を伏せ、耳をふさいだまま脳裡で繰り返していた、「だめだよ、だめだよ」
降りてきた与吉がためらいもなく屋形船の櫓を漕ぎはじめた。膜をかぶったモーターボートも、
ぐいぐいと引つ張られてついてくる。

「強ええなあ、与吉さん!」

津軽は感心して与吉に声を掛けた。日に焼けていて、三十代半ばに見える与吉は、鋼のような
脚を剥き出しに、土にまみれた野良着を着ている。太ってはいないが、力を入れるたびに腕や胸
の筋肉が盛り上がる。

いっぽう、あちこち繕いがほどこされている綿製の粗末な上着に半ズボンをはいた幼い宏則は
屋形の中で横たわり、熱にうなされているようだ。

「お父さん!」

在央は相変わらず手首から血を滴らせながら宏則に呼びかけた。幼子の枕元に坐り込み、苦
しげな顔を覗き込む。櫓のしなる音、舟が波を切る音、行き交う他の船のエンジン音などが河口
の空間に拡散している。額や体全体が火のように熱く、脈拍は早鐘を打ち、呼吸も浅く速い。
「病院に連れていかんば!」

花巻「はよう119番へ電話しな」

津軽「でも、この場所をどないして教えるんや」

危険な症状を理解する術も、鎮める方法も持たない彼らは途方に暮れた、一人を除いて。

「ほつといてくれ、私の子のことは私が責任を持つ」

与吉がきつぱりとした口調で言った。

「どうしようっていうんだよ、おじいちゃん」

在央が困惑と怒りの表情で尋ねる。与吉が櫓を漕ぐ腕にいつそう力を込めた。

「満州へ行くんだ」

津軽と花巻と、動作でその表情を推測するしかない小浜が、驚いた表情で顔を見合わせた。

「冗談は明後日にしてくれへんか」

あわてたようすで津軽が与吉へにじり寄る。

「そや、わいらはただ待ってほしい言われて来ただけや」

「だから、だめよって言ったじゃない」

いつの間にか、櫓を漕ぐ与吉に寄り添っていた婁巳が笑った。

「婁巳、なにしてるんだ」

在央が圧しつぶして波形が鋭角になった声を発した。光っているどころか、見えさえしないのに、水面が緑色と紫色の斑模様になり、女の淫水のおいが漂いはじめた。

婁巳が敵を威嚇する狼の眼差して屋形船とモーターボートは与吉の目指さない進路を無視して、風景のない風景がさらに後退した虚景の方向へ水面ではなく膜の浮力で宇宙空間に降下してゆく。淫水のおいが徐々に形を現わし、真空中だが膜を伝って在央たちの聴覚に届く音がとろけはじめた。

西方であると確信できる方角からオレンジ色の日輪が、暗黒の水平線において犯しながら、生ぬるく熔融する音とともに昇ってきた。宇宙塵が光を乱反射し、茜色の四次元が真球の虹をドットに分解する必要はなく、ゆっくりと太陽の全像は苦悩と法悦の台座に接点を愛撫した。屋形船とモーターボートは重力レンズに嵌り込み、宏則は小さな上体を起こして熱で潤んだ眼差しを剥けた。攀られるように他の四人も死線をさまよっている。

太陽の背後に、さらに明るく彫琢された金色が放射しはじめた。同時に、太陽の輪郭が陽炎となり、億億万劫の時間が経過した。

包括する背景には無量の変化が生じ、いつさいの変化も起きなかった。さまよっていた10本の視線は経路和の差損に圧着され、緑色の涙に浸るといふより、我知らず櫓を手離れた与吉も、ウエットスーツを上半身脱いだ小浜も、両の手のひらを合わせ予断を放棄した。

陽炎はゆっくりと収束するかに見え、また燃えさかり、さらに収束し、しだいに形状として固定しつつあった。否、固定ではなく、はやくも老廃物を出しながら細胞を萌え立たせ、実存において本質を経過させつつある、捉ええぬ背反の嵐が吹き荒れる。

「みな みがない みな みがない みな みがない みな みがない……」

宏則が讒言のように口の中でつぶやいた。そして物理現象を拒絶した症状から、心肺機能の衰えが結露しつつ脱してゆき、見る間に年齢を重ねはじめた。太陽はすでに眼となり、顔となり、

頸が伸び、紗うすきぬに覆われたふくよかな上体が姿を現わした。めくるめく光背に祝福された素粒子の構造物は胡座あぐらをかき、臍の下で両手の指で輪をつくっている。その奥では聖門が透明な淫水を溢れさせ、においの実相を降り注いだ。

降り注ぐ実相はまさに無相だった。においの暗黒合成につれて、宇宙の背景放射がほぼ 273.15 K までには上昇しなかった。

「満州だ……」

与吉が、感極まった声でつぶやいた。そして、股間から出した太く長い舌を梵天に至らしめ、力強く聖門へ突き進んだ。構造物はいつそう生体物性を顕わにすると、二酸化炭素や水分、細胞の死骸等々が温度勾配によってたゆたわないのは、まるで阿弥陀如来ではないのかもしれない。舌は伸びながら平べったい電源プラグの二本に分岐し、コンセントの差し込み口との間に僅かに剥き出しとなっているプラグに細い銅線を巻き込みたい衝動に駆られていた。明らかに短絡してブレーカーが落ちるだろうことを確信しながら1アンペアの電流が心臓を貫く予感に胸がざわつき、舌はふたたび巨大なナメクジへと生長しつつ食い込み、宏則は球根のような根本からチューブに入り込んで、強力な放射とともに聖門の内部から突き抜けていった。

みんなが事象の推移を茫然と系しているひしゃげた多曲面体のなかで与吉はうつぶせになり、しばらく息を弾ませていた。においは薄れ、光背のフォトンが力なく波形を失い、肉髻にくげから紺青の旋髪せんぱつへかけて後ろ姿がしぐれに融けてゆく。袈裟が濡れそぼり、露出した肉肌が宇宙線に侵され爛れながら、細胞の崩壊と癒着が中心放射を起こし、あたり一面が白く粘度の高い液をドーム状に湛える湖沼へ変容した濃い霧のなか、茫々と広がる草原にのびる鐵路が見え隠れする。

力なく立ち上がった与吉が、弱々しく櫓を漕ぎながら言った、「満鉄か……?」

婁巳がいきなり屋形船から白濁の湖面へ飛び込んだ。在央もすぐに飛び込み、粘液の中で丸く収縮する婁巳に近寄ろうとした。手首からの流血が白い液体の表面に浮き上がり、赤い模様にならないうで乱れる。ウェットスーツを全部脱いだ小浜が後を追って飛び込み、海岸線からせり上がった小山にへばりつくように建っている造船所に、骨組みに厚い鋼板の鎧を着けた巨艦の姿を発見した。その光景はすぐ幻のように膜化され、逆転の旋律とともに婁巳が魚類ではない卵へと川の流れであった。

在央は卵の婁巳を左の掌にすくい取り、右腕で粘液を掻き舟縁へたどり着いた。そのとき、在央の足が引つ張られた。小浜が在央を沼の中へ引き込もうとしている。

「なにをするんだ!？」

「ダイビングして遊ぶとたい」

「じょうだんじゃない、放せ!」

しかし小浜は在央を引きずり込んだ。「息ができない!」と藻掻いていた在央はふと、自分が呼吸をしていることに気付いた。

(つづく)